

時の動き

主体的にペンライトを持つて

市民連合共同代表

菱山 南帆子



今年の2月8日。衆議院選挙の投開票日。高市自民党が圧勝し、立憲野党は大敗。ベテランのリベラル議員までもが次々と落選し大きく議席を減らし、まさに「焼け野原」状態になった。選挙直前に突如として結成された「中道改革連合」の登場で今までの市民と野党の共闘が音を立てて崩れたことにより10年間かけて築き上げてきた運動体制が根底から揺るぎかねない事態になった。しかしよくよしている時間は私たちにはなかった。なぜならば、衆議院は改憲派が大きく議席を占めることになったからだ。戦後最大の憲法の危機が始まった。

選挙の結果を受けてその日の夜中に私の地元である東京・八王子の仲間に声をかけて翌日の夜に街頭宣伝を呼びかけた。なぜ、地元から始めたのか。それは悔しくも当選させてしまった裏金・統一協会の自民党、萩生田光一氏が当確後のインタビューで「これで憲法改正発議ができる。自民党はそのために党を作ったのだから」と話したことに危機感を持ったからだ。その晩は急な呼びかけに50名もの市民が八王子に集まった。そしてその翌日は首相官邸前で改憲反対の緊急行動を呼びかけた。そこにはなんと400人以上の市民が駆けつけた。

選挙結果に落胆し落ち込んでいるのではないかと心配し、励まし合う場になれば、との思いで呼びかけたので、参加者はせいぜい100人ほどでいつものなじみのメンバーが来るのだろうと考えていたが実際は違った。初参加者が多く官邸前に駆けつけたのだ。SNSのハッシュタグをみると初参加者のコメントが羅列している。追いきれないほどに。これはもしかして希望ある運動展開になるのではないか、そう直感した。

私はすぐに近日中に控えていた、安保法制が強行成立させられてから10年以上続けている毎月19日の行動に

◆時の動き

向けてペンライトなど光を持って集まろうと呼びかけた。これは韓国で24年12月に、当時の尹大統領が突如戒厳令を発令したことに抗議し、ペンライトを手に市民が立ちあがり光の革命と言われたデモを行った。昨年2月に参加した私は、日本でも展開しようと思つたと訴えていたのでチャンス到来と思つた。今こそこの呼びかけは響くのではないかと思つた。

韓国でのこの光の革命には経緯がある。かつて軍政だった韓国が民政にするためにリアルに血を流しながら闘った民主化運動の中で、初めは火炎瓶を手にした市民が民主化運動を経て、キャンドルに代わっていくことよつて非暴力の闘



ペンライトやプラカードを持ち国会前に、多くの女性・若者たちが集まり、全国的に拡大へ

いに変化していった。そして、2017年のキャンドル革命の時、与党から「ろうそくの火は風が吹いたら消える」と言った嫌味に怒つた民衆が翌日から消えないLEDのキャンドル型のライトを持ち始め、キャンドル革命が起きた。今回の尹大統領退陣デモでも主催者はLEDのろうそく型ライトを準備していたそう。

しかし、集まったのはそれぞれが応援しているアーティストの応援棒（ペンライト）を持った女性たちだった。

ペンライトを持って集まる。それだけで主体的になれる。この市民運動へのハードルの低さは運動の広がりや拍車をかけた。韓国で始まった光の革命は聖火リレーのように日本にも引き継がれ、東京だけではなく

今や全国各地にまで波及している。

2015年の安保法制を巡る全国での大闘争から、市民運動は冬の時代を過ごしてきた。マンネリだなんだと言われながらも、各地で地道な草の根運動を続けてきた。この継続的な闘いが今回の焼け野原からの立ち上がり土台になったと確信している。

初めてデモに参加した人たちに話を聞くと、「自分たちの日常が脅かされるのではないか」という事に危機感を持ち、光を手立ちあがったという話を多く聞いた。従来の「子や孫に平和な社会を残したい」といった思いと、「私の日常を脅かさないで」といった切実な若者たちの思いも加わつてこれほどまで大きな運動になっているのだ。頭でかちの上から目線の運動はもう受けない。沈黙していた人々が暮らしを守るために立ち上がった。優しく柔軟で寛容性のある運動にアップデートしていこう。(ひしやま なほこ)